

## 無我愛の特徴と問題点

### 三宅守常

一  
無我愛及び無我愛運動を理解し評価するには、第一に伊藤証信の著作や雑誌「無我の愛」等に見られる理念を考察すること、第二に運動史の側面における対外的な、形にあらわれた部分の考察をすること、この二点は必須条件であろう。そしてこの中でも、第一の視点は無我愛の提唱者が伊藤証信自身であるだけに、何といつても基本となるわけである。また雑誌「無我の愛」には毎号伊藤と一般読者の質疑応答の形式のものがあり、そこにも無我愛の特徴が見出せると思われる。そこで無我愛理解の段階として、まず第一の視点にしばらく

り雑誌等を中心に初期(明治期)の無我愛の理念について簡条的に列挙してその特徴及び問題点を考察しようと思う。

### 二

明治三十七年八月二十七日夜十時頃、心理的に変化を起こ

し(伊藤は心靈革命と呼んでいる)、我執法執の繫縛より脱却し森羅万象が愛の活動であると自覚した伊藤は、この悟境を伝道すべく、翌年四月「日曜通信」(これについては拙稿「日本大衆教育制度・精神文化研究所紀要」第十二集所収「初期無我愛運動の活動について」を参照)を配付し、同年六月十日雑誌「無我の愛」(以下雑誌と略称する)を創刊し、本格的に無我愛運動が展開されてゆくわけである。この創刊号の冒頭に「確信」文がある。

吾人は仏教なるが故に信ずるに非ず、基督教なるが故に信ずるに非ず、只、絶対の真理なるが故に之を信ずる也、何をか絶対の真理といふ、曰く云ひ難し、且く語を藉り、無我の愛と名けんか、夫れ宇宙の本性は無我の愛也、宇宙を組織せる一切の個体は、其本性に於て無我の活動也、即ち、一個体が自己の運命を全く他の愛に任せ、而も同時に全力を奮つて他を愛する、之を無我の活動といふ、(中略) 飄て思ふ、釈迦、基督、孔子、親鸞等の諸聖の道、亦実に之に外ならざりしを(傍点筆者)

この一文は無我愛の代表的理念であると同時に、動かすことのできない根本的理念でもあった。したがって、まずこの中から特徴が見出せるわけである。伊藤は心靈革命以後、真宗大学退学、そして既成教団の現状を不満として宗門離脱という行動に及んでいることを踏まえて

第一に、文字通り既成宗教の言う如くの絶対的真理は真向からではないが否認していることである。

第二に、宇宙天然自然の真相及び現象としての活動そのものが間違いないの絶対的真理だとしたこと。

第三に、その宇宙天然の運行活動はすべて愛という名で表現される、つまり愛意識の關係で諸法真相をとらえたことである。つまり宇宙天然の本性は無我であり、この運行による森羅万象は愛の活動であり、人間もその一部分であるという根源的な宗教的真理を標榜したのであった。

第四に、では愛とは一体如何なる概念であるかと言うと、雑誌第十五号に

疾病、盜賊、戦争、天災、地変など通常不幸と呼ぶるゝことは、皆君の我執を打破するの資料となり、豊年、健康、平和等、通常幸運と云はるゝことは、皆君の愛を増長せしむるの資料となる

とある如く、宇宙天然の愛には二種類あり、前者は人間の我執を打破するので破壊と呼び、後者は人間の愛を増長せしむ

るので長養と言うが、結局いづれもその本性、真相においては絶対愛の活動で善だと伊藤は言うのである。それは雑誌第十一号に

宇宙は愛也、草も愛也、木も愛也、土も愛也、石も愛也、小は極微分子より、大は天地に至る迄、一として愛ならざるは無き也と述べていることで明らかである。さらに雑誌同号で

親の子に対する慈悲は愛也、子の親に対する孝行は愛也、君の臣に対する恩誼は愛也、臣の君に対する忠節は愛也、夫婦は愛によりて相和し、朋友は愛によりて相信し、国家は愛によりて相結合し、社会は愛によりて相助け、世界は愛によりて相交はる

と述べる如く、現実の社会生活における親子・主従・夫婦・国家社会等の關係までも宇宙天然の本性と同じく、間違いない愛の活動だと明言し、愛意識の理念で把握していることである。

第五として、同じく雑誌十一号に

食を好むは味の美を愛する也、耳の活動は声の美を愛する也、目の活動は色の美を愛する也、鼻の活動は香の美を愛する也、身体の活動は運動の美を愛する也、精神の活動は思想の美を愛する也

とある如く、さらに進んで、人間の身体的諸器官の活動や精神活動も、本来的に愛という機能の故に、はたらいっていると把握していることである。このあたりは、存在即愛の表現と

みた無我愛の面目が表明されているのではなからうか。

第六に、このような愛の概念をもって具体的にどのよう  
に生活するかという点、前述の傍点で示した箇所、すなわち  
「一個体が自己の運命を全く他の愛に任せ、而も同時に全力  
を奮って他を愛する、之を無我愛の活動といふ」ということ  
であり、これは無我愛の中でもかなり特徴的な理念だと思わ  
れる。が同時に問題点だとも思われるので、後に再度考察す  
ることにしたい。

つぎに、伊藤は論文「無我愛運動の今昔」(「現代仏教」昭  
和八年)で左の如く述べている。

私の無我愛の信念には種々の特色があるが、就中死後の天国と  
いふやうなものを待たずして、此世の而も現在の瞬間を常に天国  
として生きて行かうとして居る事と、神仏といふやうなものを此  
世の自然人類の外に立てようとはせず、周囲の一切を其のまま神  
仏として敬愛して行かうとして居る事とを其の主要なるものとし  
て挙げる事が出来る、私は此信念を身に体现するが為に一方に  
於ては無神無仏の曠野に住み、一方に於ては無所有の地に立たう  
とした

伊藤は「日曜通信」及び雑誌の中で日常の社会生活におけ  
る人間の持つ具体的問題を説いているが、常に日常的次元で  
解決しようとした意図がうかがえる。つまり一種の宗教的次  
元としての無我愛の世界を日常的次元に適用したということ

である。伊藤の言にみる如く、日常現実の世界の外に無我愛  
という理想世界を設定したのではなく、あくまでも日常社会  
の中において宗教的精神的理想社会、あるいはそれを志向す  
る集団を意識し、構築しようとしたのが無我愛なのではな  
らうか、換言すれば、無我愛にとつて聖の領域とは来世を拒  
否した相対的な現世のことであり、それこそが善として絶対  
的眞実であつたように思われるのである。

そこで第七として、無我愛の世界は現世来世という二元論  
的構造ではなく、あくまで現世中心の一元論的構造であつた  
と規定されよう。

そして第八に、自然人類の一切が神であり仏で、特定の神  
仏は立てないという意味での無神無仏の立場。

第九として、無我愛を信奉する人々の立場は無所有を立脚  
点としたことなどが挙げられよう。

その結果、第十として、無我愛には礼拝の対象がなく、偶  
像崇拜もなく、集団としての祭式儀式もまったくないことが  
特徴として明確になつてこよう。

以上が理念の方面での特徴であり、総合的にみると、無我  
愛は現世だけに限定し、個々の人間の存在自体及び活動、そ  
れを包んでいる現実社会の現象は宇宙の本性としての愛活動  
の具体的顕現であるという、所謂愛意識一色で万事を把握し  
たことになる。ではこの愛意識を一般の人が如何なる具体的

方法をもつて自覚体得できるのかという問題も出てこよう。ここにおいて、現実生活における無我愛の実践論の問題が登場するわけである。

### 三

雑誌には伊藤と一般読者との質疑応答を掲載している。その一部を簡単に要約してみよう。「無我愛に入れば欲はなくなるか」の問いに対して曰く「それは方向が変わるのであって、なくなるのではない、他の為につくしたいという欲に変わるのである」、「善悪の標準は如何」に対して曰く「外界に絶対的悪はない、皆善ばかりである」、また或る人曰く「働いても仲々幸福にならないのに、話を聞いただけで絶対的幸福が得られるのは少々おかしいのではないか」に対して次の如く答えている。「宇宙の一点にすぎない一人間があせって幸福になろうとするのが心得違いで、人間の運命は自然が支配するので如何ともしがたい、そのままでもよい、安心して任せればよい、たとへば君に対する空気の愛は無限である、一事が万事である、自力我執の妄念さえ除去すれば一切に対して絶対無限の愛が感じられる、その方法は聞いて心を練るより外はない、だから精出して聞くことが肝要である、人間の生存には我利の生存法、無我愛の生存法があるが、我利世界からは無我愛世界は見えない、これは自分でためした

ので間違いはない、信じて入るより道はない」。これはごく一部分にすぎないが、いかに伊藤が当時三十歳前後の若さであるとはいえ、このような論法はかなり独断的観念的に過ぎ、説得性に欠けるのではないか。しかし、この中からでも実践面における特徴が看取されるように思われる。

すなわち第十一に、この愛意識の関係を自覚する方法として個人における我の意識を除去する、つまり我利我執を滅すということが挙げられよう。

第十二に、その為にはともかく一生懸命聞いて心を練り、信じて入るより方法はないと明言していることも特徴の一つであろう。

端的に言えば、人間の存在自体が愛活動の為にあるのであって、個人的我を除去して自己は無我になり、自己の運命を全く他（具体的にいえば他人・社会・自然等）に任せ（なすがまま）で、同時に自分も全力で他を愛する（尽くし奉仕する）ことが必要なのであって、そのためには話をよくよく聞いて心を練り、我を取り去って無我愛の世界に悟入しなければならぬという論法なのである。ここで前述の特徴の第六、「一個体が自己の運命を全く他の愛に任せ、而も同時に全力を奮って他を愛する、之を無我愛の活動といふ」、この理念が実際には問題点となつてゆくのではないだろうか。

## 四

何といつても無我愛の自覚、そして提唱は伊藤個人の靈感とも言うべき一種の宗教的体験から始まるわけである。これを聞いて心を練るより外はないとすると、伊藤の自覚体得した無我愛の理念と同朋の無我愛の把握のレベルは同次元であったろうか。よしんば理念上は同一であったとしても、日常生活の上でのくい違い、実践の方面においてギャップは生じなかつたであろうか。伊藤の言う無所有の実現可能、不可能の問題はさておき、絶対的真理(愛活動)のもとに信心の生活をいとなむとはいつても、個人の運命は与えられたまま如何ともできず、他人あるいは外部の触発に自己を委譲することを承認すれば、結局個人の主体性の欠如ということにもつながってゆく懸念も生じてくるわけである。また前述の第四で述べた如く、大自然の愛活動には破壊・長養の二方面があり、いづれも終局的には間違いない運行(いとなみ)であるとはいつても、それは理念上のことであつて、現実の生活の立場からみてどの程度これを是認し得たか、はなはだ疑わしいところである。かりに百歩譲つてこれを是認したとしても、現実の日常社会は、況や善悪混淆の相対的世界なのである。これをすべて善の所為とし、愛活動の顕現として是認するとなれば、これはやはり問題点と言わざるを得ないので

なかるうか。

伊藤は「信念」の一条項として

我々の周囲は此の儘で、極めて面白く有り難いものではあるまいか(明治四十三年四月)(傍点筆者)

と述べているが、(此の儘で)の箇所では批判を受けたので、二年後に左の如く修正しているのである。

我々の周囲は一々、皆極めて面白く有り難く尊く、そうして可愛いものである(明治四十五年三月)

個人のおかれた現状をそのまま是認し、なお且つ、個人の人生運命を他に任せ、それを極めて面白く、有り難く、尊く、可愛いと感ずるほど、自己を放擲することは、凡夫にとつて至難の業ではなかるうか。伊藤自身は別にして理念上は同次元であつても個々の人間の日常生活における無我愛の実践面でのギャップは生じなかつたかと疑問視した理由はここに存するのである。また伊藤は既成教団を否認して僧籍離脱し、無我愛を標榜し、当時平民社(特に堺利彦等)との交渉も深かつたことからしても、当時の政治・宗教には反体制的な位置にあつたわけであるが、無我愛の論理からみると、一切の現象が愛の活動であるから、これを絶対善として承認するとすれば、否認したはずの政治・宗教をまさに(此の儘で)肯定しなければならぬことになる。現状を(此の儘で)絶対善として肯定してゆくことは、その時代の体制に従属し

てゆくことにも一脈通じるわけであるから、伊藤の思想が明治・大正・昭和と次第に変遷してゆくといわれる要因の一端は、彼の当初のスローガンの中に最初から内包されていたとも考えられるのである。ということは、伊藤の思想は変化していったのではなく、彼自身の思想を忠実に守ったという見方ができるかもしれないし、また、基本的理念を変更するわけにもいかず逆に束縛されていたという見方ができるかもしれないのである。

これらを要するに、無我愛の宗教的次元の理念を日常の現実社会にそのまま適用したことに問題が集約されるのではなからうか。たとえば、楠秀岑氏は論文「伊藤証信氏の精神運動を評す」〔「ピタカ」五巻六号、昭和十二年六月〕の中で次のように批判している。

精神運動はそれが如何なる形態をとるにせよ現代生活の不安と矛盾の克服を使命とせるものであり、亦何等かの程度に於て現代社会を対象とせざる精神運動は少くとも現代の精神運動としてナセンスであることは云ふ迄もない

と述べた後、

氏の懐抱せられるイデオロギーに社会の現実性に対する認識の欠如せるを見て之れを黙過することは出来ない

とし、さらに

氏のイデオロギーに於ける致命的欠陥とも云ふ可きは、社会の

無我愛の特徴と問題点(三宅)

歴史的現段階における理解と認識を欠いて居ることである

と社会の現実問題を黙殺し、理念のみで実際の社会現象を正確に把握していない点を指摘しているのである。また他にも批判はあるが、ここでは省略する。一般に伊藤の思想は観念的で歴史性に欠けるという批判があるが、その要因の一端はこのあたりに見出せるように思われるのである。やはり、宗教運動として世間的な行動をとる場合の対社会的把握が不徹底であり、概念的観念的傾向が濃厚であるという点は否めないところである。伝道布教する場合の現実社会に対する明確な対応策の面で未成熟であり、不備な点が存したといわざるを得ないのでなからうか。

## 五

以上、理念及び実践の両面から無我愛の特徴として十二点を列挙して概観し、問題点を提起するにとどめたが、やはり特徴的なものは、そのまま問題点ともなってゆくように思われる。すなわち、無我愛の信仰生活を推進してゆく時にあって、個々の具体的現実問題を解決する実践論的側面の欠陥が最大の欠陥であり、同時に問題点ではなかつたかと思われるのである。(細注略)

(日本大学教育制度研究所助手)